

## 出版とビジュアル・コミュニケーション・デザイン

文教大学大学院 情報学研究科 教授 藤掛正邦<sup>†</sup>

Masakuni fujikake

### あらまし

出版不況の底が見えない。長引く低迷傾向に加えヒット作の不在、さらには景気悪化による雇用所得環境の激しさが追い打ちをかけ、今年の出版市場は1988年以来21年ぶりに2兆円割れとなるのが確実。ネットなど、紙以外の分野でいかに稼ぐモデルを確立できるかが出版界の課題になっている。文芸では村上春樹「1Q84 BOOK1・2」が年間ベストセラー1位になった(日経新聞2009年12月27日)。村上春樹の創作方法と、新潮社装幀室と共同制作した短編小説集「めくらやなぎと眠る女」の表紙ビジュアル表現について報告する。

キーワード：ジョージ・オーウェル、未来小説「1948」、新潮社、装幀、ノルウェーの森、カフカ、スプートニクの恋人、ねじまき鳥クロニエル、シュルレアリスム、マックス・エルンスト

### 1. はじめに

文芸で社会事件と言えるのは2009年5月発売の村上春樹「1Q84」(新潮社)に尽きる。発売まもなくミリオンセラーとなり、部数的には一人勝ちだった。2009年5月は文学的な熟成に立ち返った一年だった。「1Q84」もジョージ・オーウェルの未来小説「1948」を土台に、殺し屋や謎の宗教的体験などで読者を引っ張るエンターテイメント的な導入部から、宗教と暴力をめぐる深層へと物語は下りていく(朝日新聞2009年12月12日)。

新潮社によると、全国推定部数からランクを算出するオリコンランキングでは、作家部門で断トツの1位。連動して「ノルウェーの森」など過去の作品も大きく動いた。(2009年12月17日)。新潮社は2010年4月16日発売の村上春樹さんの小説「1Q84 BOOK3」について、予定していた初版50万部に加え10万部の増刷を決定したと発表した。発売前から、予想以上に書店や読者からの反響が大きいという。昨年刊行されベストセラーとなったBOOK1は132万部、BOOK2は112万部、合わせた累計部数は304万部に達した(読売新聞2010年4月7日)。出版取次大手のトーハンと日販の両社は、年間ベストセラー(2008年12月～2009年11月)を発表した。いずれも1位は村上氏の長編小説「1Q84」(1・2巻平均)だった。文芸書が1位になったのは、トーハンでは1990年の集計開始以来、日販では1997年の渡辺淳一氏「失楽園」以来という(2009年12月4日)また、2009年11月第63回毎日出版文化賞文学・芸術部門を受賞した。

### 2. 新潮社の装幀室

株式会社新潮社は日本を代表する出版社の一つ。文芸書の大手として知られると同時に、週刊誌や、言論系の月刊誌では、保守的論調で知られる。また新宿区矢来町に広大な不動産を持っていることでも知られている。1914年には新潮文庫を発行した。他にも単行本、全集などを多数発行している。「女と子供は相手にしない」とした頑迷路線を貫いていたが、1996年に電通出身の佐藤隆信が社長に就任した事で方針転換され2000年以降は「nicola」「週刊コミックバンチ」の創刊や「旅」の女性誌化に踏み切り、従来の路線から大きく転換しつつある。社長職は創業者佐藤義亮から代々世襲によって引き継がれている。現社長の佐藤隆信(第4代)は佐藤義亮の曾孫である。

新潮社では社内に独自の装幀室を持ち、自社出版の9割以上もの書籍デザインを内部制作している。これは他の多くの出版社が装幀を外部発注するケースが多いなかで極めて珍しい。約20名の正社員デザイナーがいる。村上春樹担当は装幀室長の高橋氏である。装幀とは一般的に本を綴じて表紙などをつける作業を指す。本の表紙、本扉、帯といった外まわりのデザインで、人間の道具として機能や材料や構造を含めて考える。最近書店で表紙を見て「いいな」と思って手に取ると、新潮社装幀室と鈴木成一デザイン室のものに当たる確率がすごく多い。特に新潮社装幀室の本は質が高く書店で目を引く。書店に並ぶ美しい書籍のカバーは書籍自体の売上を大きく左右する大切な要素だ。また、本の内容に合ったデザインで、自宅の本棚に並べていて長時間満足できる本に作り上げることも大切である。

2010年5月27日受付

<sup>†</sup> 〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100 fujikake@shonan.bunkyo.ac.jp  
Graduate School of Information and Communication, Bunkyo University

### 3. 村上春樹の「挑戦」と「喜び」

村上春樹氏は短編と長編について興味深い内容を序文で述べている。「できるだけ簡単に定義してしまうなら、長編小説を書くことは「挑戦」であり短編小説を書くことは「喜び」である。長編小説が植林であるとすれば短編小説は造園である。それらの二つの作業は、お互いを補完し合うようなかっこうで、僕にとってのひとつの重要な総合的な風景をつくり上げている。僕が小説家としてデビューしたのは1977年のことだが、それ以来ほぼ一貫して、長編小説と短編小説を交互に書き続けてきた。1990年代の始めから2000年代の始めにかけて僕はあまり多くの短編小説を書かなかった。長編小説を書くことが、次々に書き続けることが、その時代の僕の主戦場であった。しかし、2005年になって短編小説をまとめてみたいという強い気持ちがずいぶん久しぶりに生まれた。衝動、というべきかもしれない。また、僕は短編小説を長編小説の一部として書き直すことが多くこの作品集にもいくつかそのような原型が収められている。「蟹」は「ノルウェーの森」の一部となり、「人食い猫」は「スプートニクの恋人」の一部として組み込まれている。「ねじまき鳥と火曜日の女」は「ねじまき鳥クロニエル」の冒頭の原型となった。短編小説として書いた物語が、出版されたあと自分の中でどんどん膨らんでいって、それが長編小説に発展していくというパターンが続いた時期があった。」（「めくらやなぎと眠る女」より抜粋）

### 4. 日本語版「象の消滅」ビジュアル表現

1993年アメリカのクノップ社から、ニューヨークなどに掲載された小説を、クノップ社副社長兼編集次長のゲイリー・L・フィスケットジョンが選び、村上春樹短編小説ベスト17編英語版「象の消滅」がアメリカで出版された。2005年村上氏の中で、日本で出版したい衝動が生まれた。村上氏担当の新潮社編集者に相談し新潮社から出版が決定。装丁室長の高橋氏は相談を受け日本語版「象の消滅」表紙ビジュアル制作が藤掛に依頼された。コンセプトは可愛い、海辺のカフカ表紙の猫を例えられ、村上氏の意向は可愛いが理由。テーマは象、前と後ろ向き2点を制作依頼される。読者層は30代女性。小説内容はカフカの不条理の謎だ。提出ラフ8点を編集者が村上氏に見せたところ可愛いではなく、村上氏の意向はシュルレアリスムと判断した。新ラフ13点を再提出。悩みぬいた末、画家マックス・エルンストの描いた「セレベスの象」を思いだしイメージを自分なりに消化表現した案が採用。村上氏は美術についてかなり造詣が深い。2週間で作品完成し納品。その後、高橋氏がNYペーパーバック風イメージでデザインした。背景黄色に紫色図像と文字の構成。透明カバーをはずすとNY原書の雰囲気味わえる。活字は通常より小さくし2000円を若い人向けに1300円に抑えた。「ニューヨークが選んだ村上春樹の初期短編17短編。英語版と同じ構成で贈る」と表紙に明記され2005年3月31日出版された。



### 5. 日本語版「めくらやなぎと眠る女」表現

2009年9月村上・短編小説集「めくらやなぎと眠る女」の表紙ビジュアルを新潮社装幀室長の高橋氏から依頼された。「めくらやなぎと眠る女」は、「象の消滅」に続いて外国の読者に向け編まれた第2短編集である。作品を選ぶにあたってはクノップ社のゲイリー・L・フィスケットジョンのアドバイスを受けた。日本版の表紙はシュールな眠る女である。空洞のコルセットを寝かすように画面構成しインスピレーションと謎を与えた。「ニューヨーク発24の短編コレクション英語版と同じ作品構成で送る」と表紙に明記、2009年11月27日出版。制作進行は2009年9月3日新潮社カフェ打合せ。1991年制作のオブジェ「aidー神の裁きー（高さ170×幅90×奥行22cm）」に手を加え使用決定。9月11日午後、新潮社別館写真部スタジオで薄い若草色の大型用紙を背景に撮影した。ところが10月の印刷直前に編集者から表紙の若草色の背景色をピンクに変更の指示があり装幀室は大忙しになる。背景色はデジタル修正し、図像部分は同じ形を重ね太くした。結局、上品なピンク色面に図像は緑色に印刷された。1カ月遅れの2009年11月25日に初版7万冊、12月5日2刷、2010年2月25日5刷というスピードで、「1Q84」に連動し売れ行き好調のようである。

おわりに、「1Q84」表紙には内容を想像させる具体的イメージは村上氏の意向で排除したそうだ。本帯を取り、表紙右下に月面写真が薄い灰色で印刷してある。発想は村上氏の奥様（写真家）だそうだ。村上氏は地下鉄サリン事件直後、日本に戻り「ごく普通の、犯罪者性人格でもない人間がいろんな流れのままに重い罪を犯し、気がついたときにはいつ命が奪われるかわからない死刑囚になっていた。そんな月の裏側に一人残されていたような恐怖という意味を何年も考え続けた」ことが出発点になったと述べている。

### 【文献】

- 1) 村上春樹著 新潮社「めくらやなぎと眠る女」2009
- 2) 村上春樹著 新潮社「象の消滅」2005

ふじかけ まさくに  
藤掛 正邦

1956年生。1982年東京藝術大学美術学部大学院視覚デザイン学専攻修士課程修了。同年4月電通入社、アートディレクターとして勤務。1987年退社独立。2003年4月より文教大学情報学部に着任。グラフィック・デザインが専門。情報学研究科で「情報デザイン特論」を担当。